

ロタウイルスワクチン

厚生労働省
ホームページ



〈ロタウイルス感染症とは〉

ロタウイルスは、主に5歳未満の乳幼児に多くみられる急性の胃腸炎の原因ウイルスです。主な症状は、下痢・嘔吐（おうと）・発熱などで、ときに脱水、けいれん、肝機能異常、腎不全を、まれですが急性脳症等を合併することがあります。年齢にかかわらず何度でも感染発病しますが、乳児期での初感染が最も重症で、その後感染を繰り返すにつれて軽症化していきます。

〈副反応〉

接種後（特に初回接種後約1～2週間）は、腸重積症※のリスクが通常より高まるとする研究報告もあります。腸重積症の症状としては、「突然はげしく泣く」「機嫌が良かったり不機嫌になったりを繰り返す」「嘔吐」「血便」「ぐったりして顔色が悪い」などがあります。これらの症状が一つでも見られた場合や、いつもと様子が違う場合は速やかに医療機関を受診してください。

※ 腸重積症は、腸の一部が隣接する腸管にはまり込み、腸が閉塞状態となる病気で、速やかな治療が必要です。ワクチン接種に関わらず、もともと3か月～2歳未満のお子さまによくみられる病気で、3～4か月から月齢が上がるにつれて多くなります。そのため、早めに接種を開始し、完了することが勧められています。

種類	対象年齢	標準的な接種期間	回数	間隔
ロタテック(5価)	6週～32週	生後2か月から出生14週6日後までの初回接種を推奨	3回	1回目と2回目、2回目と3回目をそれぞれ27日以上あけて接種
ロタリックス(1価)	6週～24週		2回	27日以上あけて接種

注意すること

- 接種前30分は授乳等を控えてください。ロタウイルスワクチンは飲むワクチンのため、お子さまが満腹だとうまく接種できない可能性があります。
- 接種後に吐き出してしまった場合でも、再接種の必要はありません。（少量でも飲み込んでいれば一定の効果があることや、複数回接種するワクチンのため一連の接種で効果が期待できるため）
- 接種後2週間程度は、ウイルスが腸の中で増殖し、便の中に含まれることがあります。おむつ替えの際は十分な手洗いをお願いします。保育園等に預けている場合は、接種したことを伝えてください。

- 2種類のワクチンがありますが、有効性および安全性に差はないとされています。
- 必要回数分を全て同一のワクチンで受ける必要があります。途中から変更はできません。
- 初回（1回目）を生後15週以降に接種することは、安全性の観点から推奨されていません。
- 腸重積の既往歴があるかた、治療が未完了の先天性消化管障害があるかた、重症複合性免疫不全（SCID）のかたは接種できません。



〈肺炎球菌とは〉

肺炎球菌は、細菌による子どもの感染症の二大原因の一つです。この菌は、子どもの多くが鼻の奥に保菌していて、ときに細菌性髄膜炎、菌血症、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎といった病気を起こします。

肺炎球菌による細菌性髄膜炎は、ワクチン導入前、年間150人前後が発症していると推定されていました。致命率や後遺症例(水頭症、難聴、精神発達遅滞など)の頻度はHib(ヒブ)による髄膜炎より高く、約21%が予後不良とされています。現在は、肺炎球菌ワクチンが普及し、肺炎球菌性髄膜炎などの侵襲性感染症は激減しました。

〈副反応〉

主な副反応は、接種部位の発赤、腫れ、37.5℃以上の発熱です。気になる症状などが見られた場合は、接種医にご相談ください。

区分	対象年齢	標準的な接種期間	回数	間隔
初回	生後2か月～5歳未満	生後2か月～7か月未満 で接種開始	3回	27日以上
追加		1歳～1歳3か月未満	1回	3回接種後60日以上 かつ1歳以降



上記の標準的な接種期間に接種できなかった場合、接種回数が変わります

① 生後2か月～7か月未満で接種を開始したが、1歳までに初回3回を接種できなかった場合

接種状況	状況に応じた接種方法	
2回目を1歳までに接種した	3回目を2歳未満で接種した場合	3回目から60日以上あけて、追加接種1回で完了
	3回目を2歳未満で接種できなかった場合	3回目は接種せず、追加接種1回で完了
2回目を1歳までに接種できなかった	2回目を2歳未満で接種した場合	3回目は接種せず、2回目から60日以上あけて、追加接種1回で完了
	2回目を2歳未満で接種できなかった場合	2回目・3回目は接種せず、追加接種1回で完了

② 生後7か月～1歳未満で接種を開始した場合

接種状況	状況に応じた接種方法
2回目を1歳までに接種した場合	2回目から60日以上、かつ1歳以降に追加接種1回で完了
2回目を1歳までに接種できなかった場合	2回目から60日以上あけて、追加接種1回で完了
2回目を2歳までに接種できなかった場合	2回目は接種せず、追加接種1回で完了

③ 1歳～2歳未満で接種を開始した場合、60日以上あけて2回接種で完了

④ 2歳～5歳未満で接種を開始した場合、1回の接種で完了



〈B型肝炎とは〉

B型肝炎ウイルスの感染を受けると、急性肝炎となりそのまま回復する場合もあれば、慢性肝炎となる場合もあります。一部劇症肝炎といって、激しい症状から死に至ることもあります。また、症状としては明らかにならないままウイルスが肝臓の内部に潜み、年月を経て慢性肝炎・肝硬変・肝がんなどになることがあります。ことに年齢が小さいほど、急性肝炎の症状は軽いかあるいは症状はあまりはっきりしない一方、ウイルスがそのまま潜んでしまう持続感染の形をとりやすいことが知られています。

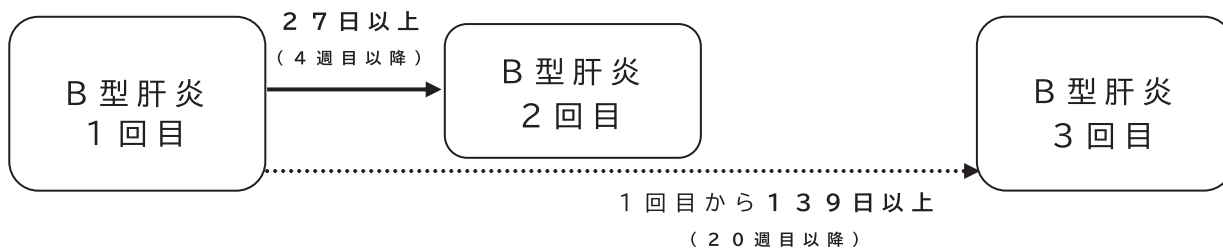
感染は、B型肝炎ウイルス(HBs抗原)陽性の母親から生まれた新生児、B型肝炎ウイルス陽性の血液・体液に直接接触した場合、B型肝炎ウイルス陽性者との性的接触などで生じます。

〈副反応〉

主な副反応は、接種を受けたかたの10%前後に倦怠感、頭痛、接種部位の腫れ、発赤、痛みがみられたと報告されていますが、新生児・乳児についても問題はなく行われています。極めてまれに、アナフィラキシー、急性散在性脳脊髄炎などの重い病気にかかることがあるといわれています。気になる症状などが見られた場合は、接種医にご相談ください。

対象年齢	標準的な接種期間	回数	間隔
1歳未満	生後2か月 ～9か月未満	3回	【1回目】生後2か月ごろに接種 【2回目】1回目から27日以上 【3回目】1回目から139日以上

※ 接種日当日を0日目とし、接種日翌日を1日目として計算します。



母子感染予防として出生後にB型肝炎ワクチンを1回でも受けたことのあるかたは、定期接種の対象とはなりません。

5種混合ワクチン・2種混合(DT)ワクチン

厚生労働省
ホームページ



5種混合ワクチンはジフテリア(D)、百日せき(P)、破傷風(T)、ポリオ(IPV)、Hib感染症を予防する混合ワクチンです。2種混合ワクチンはジフテリア(D)、破傷風(T)を予防する混合ワクチンです。

〈ジフテリアとは〉

ジフテリア菌がのどや鼻に感染して高熱、のどの痛み、犬吠様のせき、嘔吐などの症状がみられ、偽膜と呼ばれる膜ができて窒息死することもあります。発病から2~3週間後には、菌の出す毒素によって心筋障害や神経麻痺を起こすことがあるため注意が必要です。

〈百日せきとは〉

百日せき菌によって起こる病気で、かぜ症状から始まって、続いてせきがひどくなり、連続的にせき込むようになります。せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音がでます。熱は通常でません。乳幼児はせきで呼吸ができず、くちびるが青くなったり(チアノーゼ)、けいれん、突然呼吸が止まってしまうことなどがあります。肺炎や脳症などの重い合併症を起こしやすく新生児や乳児では命を落とすこともあります。

〈破傷風とは〉

土の中などにいる破傷風菌が、傷口からヒトの体内に入ることによって感染します。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素のために、筋肉の強直性けいれんを起こします。やがて全身の強直性けいれんを起こすようになり、治療が遅れると死にいたることもある病気です。

〈ポリオとは〉

口から入ったポリオウイルスが、咽頭や小腸の細胞で増殖します。ポリオウイルスに感染しても、ほとんどの場合は症状がでませんが、100人中5~10人は、かぜの様な症状があり、発熱を認め、続いて頭痛、嘔吐があらわれ、感染者の約1,000~2,000人に1人の割合で手足の麻痺を起こし、一部の人には、その麻痺が永久に残ります。麻痺症状が進行し、呼吸困難により死亡することもあります。

〈Hib感染症とは〉

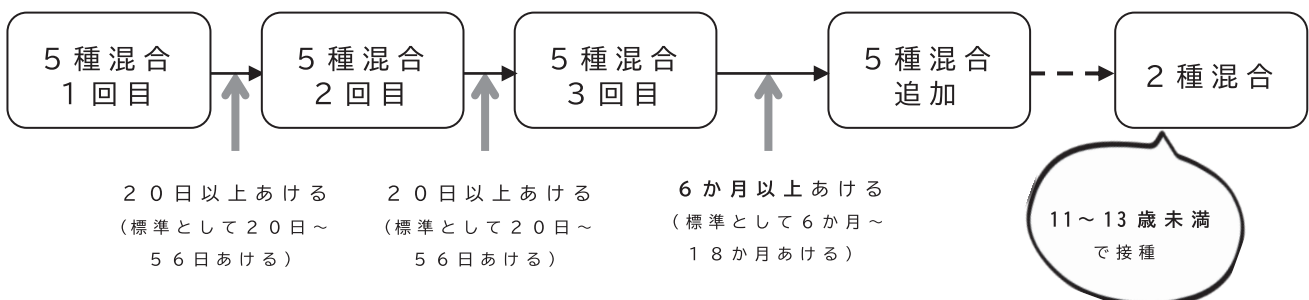
インフルエンザ菌b型という細菌によって発生する病気で、中耳炎、副鼻腔炎、気管支炎などの表在性感染症のほか、髄膜炎、敗血症、肺炎などの重篤な全身感染症(侵襲性感染症)を起こします。

〈副反応〉

主な副反応は、発熱、接種部位の紅斑、硬結(しこり)、腫れがみられます。他のワクチンよりも発熱の頻度が高いことについては、他のワクチンとの同時接種の影響があり得るなどの指摘がありますが、安全性について大きな懸念は指摘されていません。気になる症状などが見られた場合は、接種医にご相談ください。

区分	種類	対象年齢	標準的な接種期間	回数	間隔
第1期 初回	5種混合	生後2か月~ 7歳6か月未満	生後2か月~7か月未満	3回	20日以上 (標準的には56日まで)
第1期 追加			3回目終了後 6か月~18か月まで	1回	3回目終了後 6か月以上
第2期	2種混合 (DT)	11歳~13歳未満	11歳	1回	—

※ 接種日当日を0日目とし、接種日翌日を1日目として計算します。



**〈結核とは〉**

結核菌の感染で起こります。わが国の結核患者はかなり減少しましたが、大人から子どもに感染することも少なくありません。また、結核に対する抵抗力(免疫)はお母さんからお腹の中でもらうことができないので、生まれたばかりの赤ちゃんもかかる心配があります。乳幼児は結核に対する抵抗力(免疫)が弱いので、全身性の結核症にかかったり、結核性髄膜炎になることもあり、重い後遺症を残す可能性があります。

〈副反応〉

接種をした側のわきの下のリンパ節がまれに腫れることがあります。通常、放置して様子を見てかまいませんが、ときにただれたり、大変大きく腫れたり、まれに化膿して自然にやぶれてうみが出ることがあります。このようなときは接種医にご相談ください。

対象年齢	標準的な接種期間	回数
1歳未満	生後5か月～8か月未満	1回

注意すること

- 過去に結核患者との長期の接触があった場合は、事前に医師に相談してください。
- 接種部位は、日陰で10分程度乾燥させてください。
- 接種後10日頃に接種局所に赤いポツポツができ、一部に小さいうみができることがあります。この反応は接種後4週間頃に最も強くなりますが、これは異常反応ではなく、BCG接種により抵抗力(免疫)がついた証拠です。自然に治るので、包帯や絆創膏を貼らず、そのまま清潔に保ってください。ただし、接種後3か月を過ぎても接種のあとがジクジクしているようなときは医師に相談してください。

【 コッホ現象について 】

お子さまが接種前に家族など身近な人からうつるなどして結核菌に感染している場合は、接種後10日以内に接種部位の発赤、腫れ、化膿等がみられ、通常2週間から4週間後に発赤や腫れがおさまり、消炎、瘢痕化し、治癒する一連の反応が起こることがあります。これをコッホ現象といいます。コッホ現象と思われる反応がお子さまにみられた場合は、接種を受けた医療機関を受診してください。この場合、お子さまに結核をうつした可能性のある家族のかたも医療機関を受診するようにしましょう。



〈麻しん(はしか)とは〉

麻しんウイルスの空気感染などによって起こります。感染力が強く、ワクチンを受けないと、多くの人がかかり、流行する可能性があります。典型的な麻しん(はしか)は、高熱、せき、鼻汁、眼球結膜の充血、目やに、発疹を主症状とします。最初3~4日間は38℃前後の熱、一時おさまりかけたかと思うと、また39~40℃の高熱と発疹がでます。高熱は3~4日で解熱し、次第に発疹も消失します。しばらく色素沈着が残ります。主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎があります。

〈風しんとは〉

風しんウイルスの飛沫感染、接触感染によって起こります。潜伏期間は2~3週間です。典型的な風しんは、軽いかぜ症状ではじまり、発疹、発熱、後頸部リンパ節腫脹などが主症状です。そのほか、眼球結膜の充血もみられます。年長児や成人では関節炎の頻度が高く、予後は一般に良好ですが、血小板減少性紫斑病や脳炎の合併を認めることがあり、まれに溶血性貧血もみられます。大人になってからかかると重症になります。

妊婦が妊娠早期に風しんウイルスに感染すると、先天性風疹症候群と呼ばれる先天性の心臓病、白内障、聴力障害、発育発達遅滞などの障害を持った児が生まれる可能性が非常に高くなります。

〈副反応〉

主な副反応は、発熱、発疹、鼻汁、せき、注射部位の発赤・腫れなどがみられます。重大な副反応として、アナフィラキシー、急性散在性脳脊髄炎(ADEM)、脳炎・脳症、けいれん、血小板減少性紫斑病がごく稀に(0.1%未満)報告されていますが、ワクチンとの因果関係が明らかでない場合も含まれています。

区分	対象年齢・標準的な接種期間	回数
第1期	1歳~2歳未満	1回
第2期	小学校就学前の1年間(4月1日~3月31日まで)	1回

- 早期に免疫を獲得するため、1歳になったらなるべく早く第1期の接種を行うことが重要です。
- 病気の治療、予防などのためガンマグロブリン製剤の注射を受けたことがあるお子さんについての接種時期は、かかりつけ医と相談してください。
- 既に麻しんまたは風しんにかかったことがある場合でも、麻しん風しん混合(MR)ワクチン接種の対象となります。



〈水痘（みずぼうそう）とは〉

水痘・帯状疱疹ウイルスに初めて感染したときにみられる急性の感染症で、直接接触、飛沫、あるいは空気感染によって広がる最も感染力の強い感染症のひとつです。潜伏期間は通常2週間程度（10～21日）です。主症状はかゆみを伴う発疹（斑点状の赤い丘しんから始まり、その後3～4日で水疱となり、最後は痂皮「かさぶた」を残して治癒する）で軽度の発熱を伴うこともあります。通常、1週間程度で自然に治癒しますが、まれに脳炎や肺炎、肝機能の異常を伴うことがあります。ハイリスク患者（急性白血病などの悪性腫瘍の患者さんや、治療によって免疫機能が低下している人及びそのおそれのある人）では特に重症となります。

学校保健安全法の規定に基づき、保育園、幼稚園、学校への登園・登校は感染力がなくなる時期（すべての発疹がかさぶたとなる）まで停止となります。

〈副反応〉

健康な小児では副反応はほとんど認められませんが、ときに発熱、発疹がみられ、まれに局所の発赤、腫れ、しこりがみられます。ハイリスク患者（急性リンパ性白血病やネフローゼ症候群など、治療の影響で免疫機能が落ちている患者）でも一定の接種基準を満たせば接種が可能ですが、接種後14～30日に発熱を伴った丘しん、水疱（水ぶくれ）が発現することがあります。

対象年齢	標準的な接種時期		回数	間隔
1歳～3歳未満	1回目	1歳～1歳3か月未満	2回	3か月以上 (標準的には1回目終了後 6か月～1年の間をおく)
	2回目	1回目接種後 6か月～12か月		



既に水痘にかかったことがある場合は、原則として接種は不要です。
定期接種の対象とはなりません。



〈日本脳炎とは〉

日本脳炎ウイルスの感染で起こります。ヒトから直接ではなく、ブタの体内で増えたウイルスが、蚊によって媒介され感染します。7～10日の潜伏期間の後、高熱、頭痛、嘔吐、意識障害、けいれんなどの症状を示す急性脳炎になることがあります。感染した人のうち100～1,000人に1人が脳炎を発症します。脳炎のほか髄膜炎や夏かぜの様な症状で終わる人もいます。脳炎にかかった時の死亡率は約20～40%ですが、治った後に神経の後遺症を残す人が多くいます。

〈副反応〉

主に発熱、せき、鼻水、注射部位の発赤や腫れ、発疹などで、これらの副反応のほとんどは接種3日後までにみられています。なお、ごくまれにショック、アナフィラキシー様症状、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）、脳症、けいれん、急性血小板減少性紫斑病などの重大な副反応がみられることがあります。

区分	対象年齢	標準的な接種時期	回数	間隔
第1期 初回	生後6か月～ 7歳6か月未満	3歳	2回	6日以上 (標準的には28日まで)
第1期 追加		4歳	1回	2回目終了後 6か月以上 (標準的にはおおむね1年)
第2期	9歳～13歳未満	9歳	1回	—

※ 接種日当日を0日目とし、接種日翌日を1日目として計算します。

